第3話

気づいてほしいな、間違いに

そうですか

トーストや
シリアル

シリアル
わかります？

ぎゅうにく
と、

牛肉？

牛肉と…う～ん
Cornflake…
Cornflake

牛肉？

コーンフレーク
コーンフレーク
ぎゅうにく
ぎゅう…
にく？
ぎゅうにく
と…
あの、
牛肉は
ビーフですよ？
ぎゅうにく
こういう…

ワッ
違う違う
ミルク
違いますよね？
ぎゅう/にく
牛/肉
牛肉と…
牛乳！
MILK
ヨウ
ぎゅう/にく
牛/肉
にゅう
乳
ぎゅうにゅう
ですよね
牛乳

第❸話　気づいてほしいな、間違いに

タスク１　学習者が「牛乳」のつもりで「牛肉」と言ってしまいました。誤りに気づかせるためにこの教師は、学習者の誤った発話「牛肉」を上がり調子で繰り返しました。あなたは、この「上がり調子で学習者の誤答を繰り返す」という訂正方法をどう思いますか。なぜですか。

タスク２　誤りに気づかせるために、この教師はさまざまな手段を用いてフィードバックしています。この教師が試みた方法を書き出してみましょう。

・（例）学習者の発話の一部（牛肉）を上がり調子で繰り返す。

・

・

・

タスク３　この学習者は、①どの方法によって間違いに気づかされたと思いますか。②なぜ、その方法が功を奏したのだと思いますか。また、③なぜその他の方法で気づかせることができなかったのでしょうか。

①

②

③

第❸話について

今回は、学習者の誤答に対する教師の対応の方法に注目しました。

1　誤りに気づかせる方法

私たちは日常のコミュニケーションで、以下のような伝達手段を単独で、あるいは組み合わせてフィードバック[注1]しているそうです。

因みに、誤答に対するフィードバックで最もよく使われるのは、マンガにも見られた方法、つまり、問題部分を上がり調子で繰り返す方法だそうです。また、授業中、最も多く利用される伝達手段は「言語（音声・視覚言語）」だそうです。一方、日常生活では、言語以外の伝達手段が有効に利用されています。例えば、アイスクリームを注文する際、「ひとつ」と言いながら指を二本立てると、アイスクリームは二つ出てくることが多いそうです。

あなたはどの方法でフィードバックしていますか。自分のフィードバックの癖（パターン）とその効果について考えてみると、思わぬ発見があるかもしれません。

2　効果的なフィードバックとは

効果的かどうかは、学習者の日本語の知識・能力、授業の目標、学習者の好みの訂正スタイル、クラスの雰囲気、教師の得手不得手などさまざまな条件によって左右されるでしょう。たとえば、「牛乳」という単語を知っていたけれど口が滑って「牛肉」と言ってしまった場合なら、教師が怪訝な表情とともに上がり調子で「牛肉？」と繰り返すだけで自身の発話が誤りであったことに気づくでしょう。「牛乳のことですか」と正しい形を示してもらう方法を好む学習者もいるでしょう。絵や図式化が短時間に正解につながる場合もありますね。フィードバックのレパートリーを増やし、その場に応じて使い分けができるようになるといいですね。

（文野峯子）

注1　ここでは、Fanselow（1987）を参考に、「正しさの確認や調整の必要性を意図したコミュニケーション」と定義します。たとえば、学習者の返答の後に続く「いいですね」や「ちょっと違います」などのコメントもフィードバックです。また、フィードバックの伝達手段の分類や例もFanselow（1987）を元にしています。

伝達手段		例
言語	音声言語	「いいですね」と言う、正解を与える
	視覚言語	文字で示す
非言語	絵、音、色、図	絵を描く、「ピンポーン」と音で間違いを知らせる、赤信号マーク、×マークなどで知らせる
パラ言語	音調、表情、ジェスチャー	上がり調子や表情で疑問を示す
沈黙		黙る